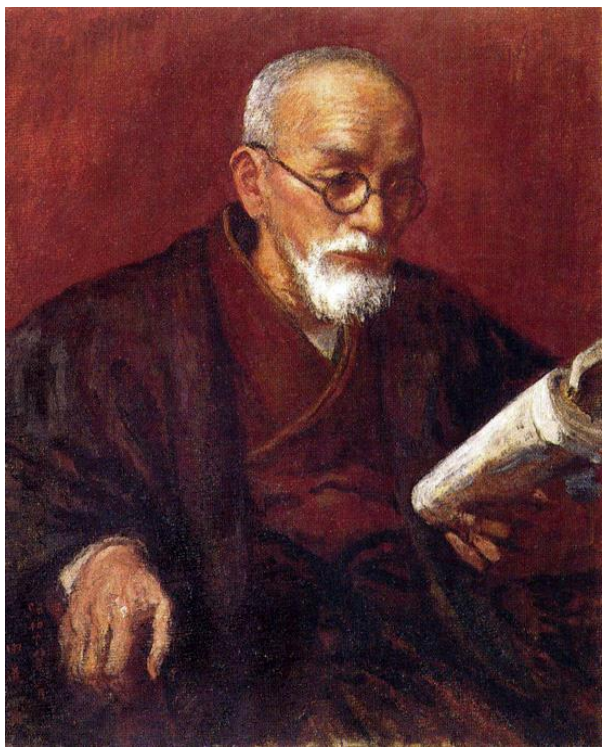
松坡　田辺新之助

文久二（1862）年～昭和十九（1944）年

名は正守、字は子慎、称は新、新之助、別号に菱花山人。

唐津出身の教育者・漢詩人。東京大学予備門で学んだ後、共立学校（後の東京開成中学校）英語・地理教授となり、明治三十（1897）年から校長を務めました。同校校長在職中の三十六（1903）年、逗子に第二開成学校（今日の逗子開成中学校・高等学校）を、翌年鎌倉に鎌倉女学校（今日の鎌倉女学院中学校・高等学校）を設立し校長となりました。



八十二歳の田辺松坡　田辺至画（1943）逗子開成所蔵

一方、岡本黄石大沼枕山・に漢詩を学び、明治十七（1984）年から晩翠吟社に参加。二十代半ばで『日本名家詩選』に作品が採録されたことで詩壇に颯爽とデビューし、『毎日新聞』漢詩壇の撰者も務めるなど、明治から昭和の漢詩壇で活躍しました。

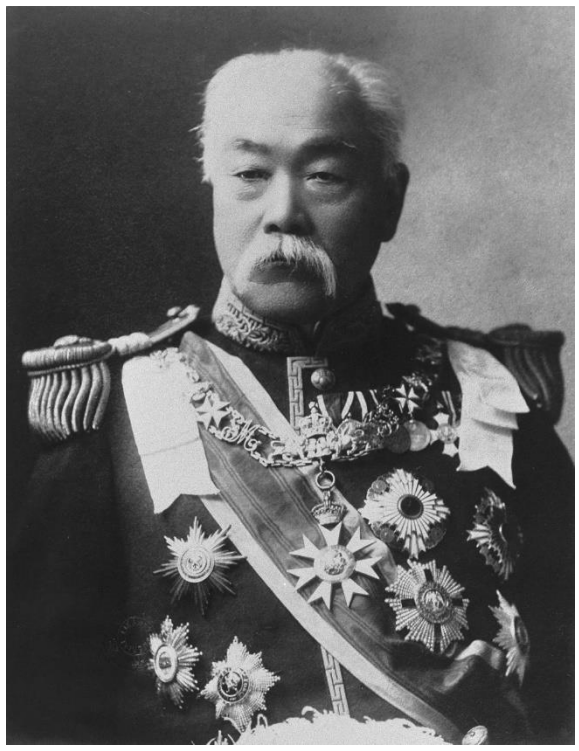
明治三十年代末に鎌倉に転居し、亡くなるまで四十年近く鎌倉に住み、鎌倉同人会設立（「同人会」の命名、設立趣意書の起草）に関わり、鎌倉市内の旧蹟保存指導標の撰文にも携わりました。漢詩の講読会を開き、自ら漢詩会（松社）を主宰するなど、清雅な都市鎌倉の文化に大きく貢献した人物の一人でもあります。

戦後、ご遺族より膨大な旧蔵書が鎌倉図書館に寄贈され、今日「松坡文庫」と呼ばれています。

松方正義

天保六（1835）年～大正十三（1924）年　号は海東

鹿児島出身の政治家、公爵。維新後、大蔵大輔・内務卿をへて、参議簾大蔵卿。明治二十五（1892）年まで大蔵卿・蔵相として松方財政を展開。銀本位制・金本位制を確立するなど財政・金融制度を整備しました。二度政権を担当し、引退後も元老として政財界に大きな影響を与えました。



松方正義

PUBLIC DOMAIN

田辺松坡は明治二十年代半ばより中央漢詩壇で活躍しますが、薩摩海軍閥の樺山資紀（1837～1922）の漢詩会「緑雨会」に参加しました。緑雨会には薩摩出身の海軍軍人が多く参加していたこともあり、松坡はそうした人脈の中で、松方正義の知遇を得たと思われます。東京開成中学校教授・校長田辺新之助と政治家松方正義との交誼ではなく、漢詩人であり書も善くした田辺松坡と、大師流の書の大家であり文人とも言える松方海東との文墨の交わりでした。

三十年ほどの年齢差のある二人の交友について、海東公の死を悼んで詠じた松坡の詩稿「奉輓海東松方公」（鎌倉女学院蔵）には「把臂促膝　小友を喚び忘年の交　当に父子の親たるべし」（原漢文）とあります。年齢の違いをを忘れ、手を取り、膝を交えて、父親が子に接するような交友でした。

一、松坡、海東侯に陪して那須へ

明治二十年代末乃至三十年代初めから親しく交際するようになった海東松方正義と松坡田辺新之助ですが、松坡が鎌倉に居を移してから、松坡は由比ヶ浜の鳥居にあった海東の別荘（松方別荘、鶴陽荘）にしばしば招かれています。書を善くし文芸についての談話を好んだ海東は鶴陽荘に鎌倉在住の（別荘族を含め）文芸愛好家を招き、歓談することを楽しみにしていたそうです。松坡もその一人でした。そうした折に松坡が詠んだ作が残されています。松坡はまた海東が熱海に営んだ別荘（水月荘）も訪れています。

大正八（1919）年六月、松方正義が那須塩原千本松の別荘（那須別邸、萬歳閣）に遊ぶのに伴をして那須に赴いています。松坡に別邸内の名勝十二を称えた松坡の連作詩「千松苑十二勝」（『大正詩文』第三巻第五号　大正八 1918 年九月）があり、その自注には次のように記されています（原漢文）。

己未六月、海東侯に陪し、千松苑に游ぶ。留帯すること三日。乃ち苑中の十二勝を択び、各々五言四句を以て係く。一時の興、到るの作。元と足らず、以て大方を示すなり。

また、「陪海東侯游千松苑」と題された別の七言律詩もあり、尾聯（第七、八句）には、

相公公退逍遙處　相公　公退　逍遥の所
一洗平生芥帯胸　一に平生芥帯の胸を洗う

とあります。海東が政界の一線を退いたあと、苑内を散策しながらゆったりと時を過ごし、平生の俗世での生活の中で胸の中に溜まった塵芥を洗い流す場だ、とあります。那須別邸で三日間を共に過ごした二人は、

書や文芸について語り合い、「平生芥帯胸」を洗い流したに違いありません。

大正期の那須別邸
多くの羊が飼育されている

※　那須別邸（萬歳閣）

明治三十六（1903）年、千本松牧場内に建てられた那須別邸。那須塩原千本松牧場内のこの建物は、床面積三三四㎡の洋館で、一階が石造、二階が木造から成る。翌年、皇太子（大正天皇）が駐泊の際、折からの日露戦争で遼陽が陥落した報が届き、一同で万歳をしたことから「萬歳閣」と呼ばれるようになった。

（写真はいずれも松方峰雄氏提供）

二、鎌倉宮碑

鎌倉二階堂の鎌倉宮境内の奥まったところに、鎌倉宮碑があります。中央の断碑の跡が傷ましいものの、堂々たる碑です。建碑は大正十（1921）年、篆額「鎌倉宮碑」は元帥陸軍大将大勲位功二級伏見宮貞愛親王、撰文は少内史正六位巌谷修（一六）（明治六年五月撰）、書は正二位大勲位侯爵松方正義。

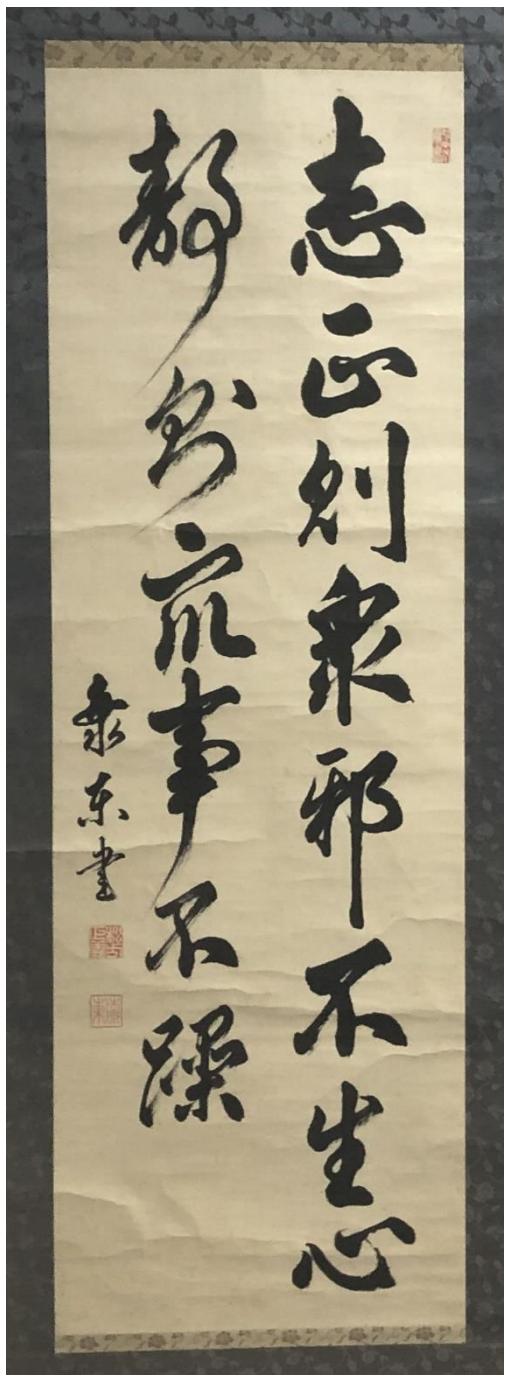
鎌倉宮碑（鎌倉宮）

この碑の建立については、海東松方正義と松坡との間に次のような逸話があります。

明治六（1973）年五月の明治天皇鎌倉行幸直後、鎌倉宮についての碑を建てる議が起こり、巌谷一六が撰文までしたのですが、どんな経緯かそれは沙汰止みになり撰文は埋もれたままになっていました。一六の没後、その遺稿の中から撰文を見出した松坡は、是非とも碑を建てたいと東奔西走。書を誰に依頼するかが問題でした。一六と並んで明治三筆と称えられた日下部鳴鶴に揮毫を願うのが相応しいのですが、鳴鶴は老病で筆が執れません。困った松坡先生は海東侯に相談に行きました。相羽清次『明治天皇鎌倉行幸御事蹟』（1928）に松坡先生自身の談話として載録されています。

当時多く鎌倉の別荘に居住せられて、土地のことにも何かと心配せらるゝ松方老侯に、ご意見をうかゞいましたところが、公は暫くお考へになりましたが「それは私に書かせてくれまいか」と豫期せざる仰せでありました。尤も老侯は、晩年殊に書道に精進せられて居ることは承知してはゐましたが、この揮毫に老侯を煩はすことなどは、毫も念頭になかったことであり、又平生お達者とは申せ、當時八十七歳の御老體でありますので、かような正楷の細字の揮毫に、老侯を煩はすに忍びませんので「それは恐縮致します。誰かお見立て下さいますれば、お名前は拝借だけで結構であります」と申し上げたるも、「いや私に書かしてくれ」との、固いお意氣込みで居らるゝので、「然らばお願い申します」といふことになり、文字の大きさや配置を、私が按排して、老侯に差上げました。（同書 pp.22-23）

この談話からは、二人の交流の様子が判ると同時に、建碑にかける松坡先生の苦労が窺われ、同時に、海東侯の「誠慤謹嚴（せいかく）なる面目」（同書 p.20）が偲ばれ、心打たれます。



松方正義の書

「志正則衆邪不生　心静則衆事不躁

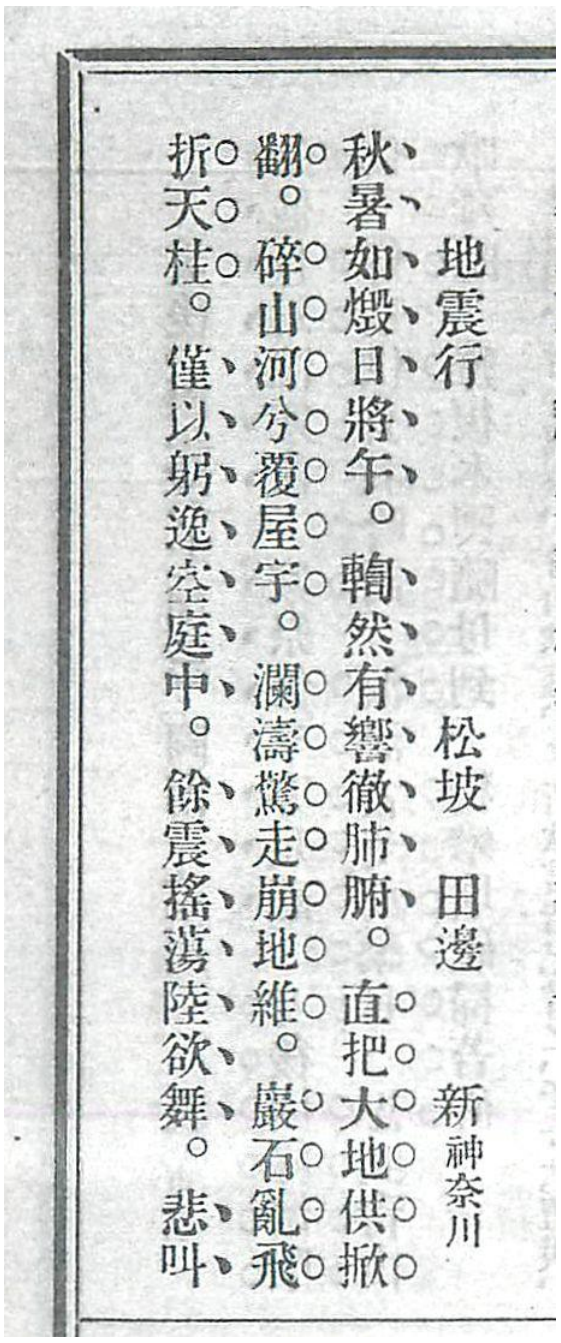
海東書」

（個人蔵）

三、関東大震災で被災

西瓜で渇を癒す

大正十二（1923）年九月一日、関東地方を襲った大地震で、鎌倉材木座に住んでいた松坡は被災します。住所の詳細は不明ですが、大町に近い飛地だったようで、津波の被害には遭いませんでした。また家族全員も無事でした（長男元はドイツに、次男至はフランスに留学中）。震災直後に詠んだ七言四十八句の長詩（「地震行」）で松坡は震災の恐ろしさを描いています。



地震行　松坡　田邊　新神奈川

秋暑如燬日將午。鞠然有響徹肺腑。直把大地供掀翻。碎山河兮覆屋宇。瀾濤驚走崩地維。巖石亂飛折天柱。僅以躬逸空庭中。餘震搖蕩陸欲舞。悲叫

田辺松坡「地震行」（『文字禅』第七巻第十一号　1923.11.1）

秋暑燬（や）けるが如く、日将に午ならんとす。鞠然（こうぜん）、響き有りて肺腑に徹し、直ちに大地を把り、掀翻（きんぽん）を供にす。山河砕け、屋宇を覆い、瀾濤驚走し、地維崩れ、巖石乱飛し天柱を折る。（原漢詩）

秋にも拘わらず焼けるが如くに暑い日の正午前、轟然たる響が肺腑を貫き、直ちに大地が翻った。山河は砕けて屋宇を覆い、瀾濤が驚走し、大地を支える綱が崩れ、巖石は乱飛して、天を支える柱が折れたかのようであった。激しい地震の様子が表現されています。

由比ヶ浜一の鳥居の別荘に住んでいた海東公もまた被災します。松方公の被災については「松方公死す」との誤報も含め、多くの書物に記載されていますが、ここでは、知られざるエピソードを紹介しましょう。

海東公の死を悼む松坡の七言四十八句の「奉輓海東松

方公」（鎌倉女学院所蔵の詩稿）に記されています。家の一部が倒壊したものの、無事だった松坡は直ちに松方別荘に駆け付けます。

覿面先喜兩無恙　排墻同是偶然免
此時玉露恩霑深　西瓜療渇甜於蜜
覿面（てきめん）先ず喜ぶは　両（ふたり）恙無し
墻を排し同に是れ　偶然に免る
此の時玉露の恩　霑（うるお）いて深し
西瓜渇（かわき）を療（いや）し蜜よりも甜（あま）し

屋宇が倒壊し、書生の手によって救出されて後庭に横たわっていた海東公の姿を見て、松坡はその無事を喜び（海東公は松坡の無事を喜び）、海東公から西瓜を分ち与えられて渇きを癒したというのです。松坡先生は、公に生きて再会できたことに加え、西瓜で喉の渇きを癒したことを、「玉露恩霑深」（玉露の恩、霑（うるお）い深し）と表現しています。詩では西瓜で渇いた喉を潤したのは松坡自身だとありますが、海東公も共にと想像してもいいでしょう。凄惨な状況の中の一つの情景ですが、心安らぎます。

因みに、「松方公死す」との誤報について、松坡は

「後、三日を経て、蜚語紛たり。松公厄に遭い、万人忱（おそ）ると。我れ独り、終始訛伝（かでん）を嗤（わら）う。」（原漢詩）と詠んでいます。

被災後、海東公は静岡県興津の別邸で静養するようになりましたが、老いも進みます。大正十三（1924）年四月三日、松坡は海東公の病床を見舞っており、その三か月後、七月二日、海東松方正義は帰らぬ人となったのです。